

歌帝後鳥羽院と隠岐の風景

吉田 薫

観光客が増加した理由

石見銀山は 2007 年に世界遺産に登録されたことにより年間の観光客数が 50 数万人に、境港市の水木茂ロードは NHK 朝のドラマ『ゲゲゲの女房』が放送されたことにより 372 万人（2010 年）にと従前から倍増した。両者とも観光地の内容は変わらないが、新たな情報が周知されたことによる効果といえる。

本稿は、既存の観光地の風景に情報を加えて観光客に来訪を促すこと、及び土木事業における観光の位置づけについて考えるものである。

海士町

隠岐の島は、本土に近い 3 つの島からなる島前とうぜんと、中心地・西郷のある島後とうごの 2 つに分けられる。

海士町のある島前の中ノ島は、豊かな海と豊富な

湧水に恵まれて、古くから半農半漁の自給自足に適していた。また奈良時代から流人の島とされ、小野篁、後鳥羽院、飛鳥井雅賢などが配流となっている。

海士町の現在の人口は 2,400 人弱である。平成の大合併期にあえて単独町政を選択し、新産業創出による雇用の場の増加や、UI ターン施策に注力した結果、人口の 1 割近い若年層が移住し、全国的に注目を浴びている。

後鳥羽院

後鳥羽院（1180 年 1239 年）は、平家とともに都落ちした安徳天皇の後を受け、後白河法皇の庇護の下で第 82 代天皇となられた。幼時より英明で聞こえ、長じては文武の諸芸百般に秀でて有職故実にも詳しくあったという。和歌については格別熱心であり、和歌所を再興し歌会を頻繁に主催するとともに、藤原定家などに命じて新古今和歌集をつくられた。

新古今和歌集は八代集の最後を飾り、古代と中世の狭間に花開いた和歌史上、最高の傑作ともいわれる。新古今調の和歌は、題詠や本歌取りなどにより技巧を凝らし、歌意を重ねて美や情調を表現した。

見渡せば山もとかすむ水無瀬川 ゆうべは秋と思ひけむ

広やかな春景色を見渡せば、水無瀬川の流れる山のふもとが霞んでいる。夕暮れは秋がいいとは（清少納言は）何を思ったのだろうか。

院の歌である。水無瀬川は京都と大阪の境、現在の大阪府島本町で淀川に合流する。そのほとりに院の離宮があった。この歌は古来より評判がよく、文筆家・丸谷才一は後鳥羽院一代の絶唱であるのみならず、和歌史上最高の作品の一つとしている。

後鳥羽院は、当代文化の中心的な存在であったばかりでなく、のちの日本文化に大きな影響を与えた一人である。身近な事柄では、国家の紋章の菊花紋は院の愛好に由来する。

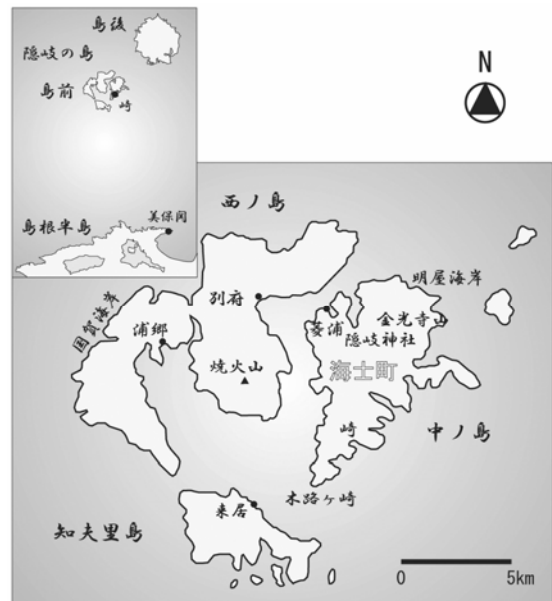


図 1 . 位置図

承久の乱と隠岐配流

鎌倉幕府は、源頼朝の急死の後、北条氏が台頭する過程で重臣の反乱、さらには実朝の暗殺(1219年)など内紛続きであった。不安定なこの時期を逃すまいという判断があったのではなかろうか。しかし、その挙兵は承久の乱(1221年)として朝廷方の敗北に終わり、後鳥羽院は数人のお供とともに隠岐に配流されることとなった。

海士町の風景と後鳥羽院の歌

院の島での生活は不本意であったに相違ないが、新古今和歌集の改訂、歌論書の作成、遠島歌合えんとうたあわせの開催、歌集「遠島百首」及び「遠島五百首」の作成など、和歌についての批評や創作活動には精力的であった。また、刀鍛冶を呼び寄せて月ごとに作刀されたとも伝わる。そして崩御されるまでの19年間をここで過ごされた。

風景には独特の気分があり、人の心が同調するとき、一層味わい深いものになる。

一方、観光地に適切な情報が加わると大いに人を引き付ける。石見銀山では知識が加わり、水木ロードでは夫婦の情のストーリーが反映するようになった。立教大・安島教授が必要だとする観光の価値を認識する「まなざし⁽¹⁾」は、見ようとする意思と換言できる。すなわち、風景に「知・情・意」を加えることが風景観光の第一歩であると思われる。

そこで私は、海士町の観光地の風景と後鳥羽院の心情が詠み込まれた和歌を組み合わせ小冊子⁽²⁾を刊行した。自然を主とした風景に、古人の和歌(歴史・文化)を重ね、その風景を説明しようとしたのである。小冊子は海士町観光協会を經由し、観光客に届くこと期待している。

紙面を借りて、数シーンを紹介したい。

われこそはにいしまもり新島守よ 隠岐の海の荒き波風 心して吹け

我こそは新たにやってきた島の守護である。荒れた隠岐の波風よ、心して吹くがよい。

帝王然とした歌であり、流人の弱気な姿はない。旅人は、船上より島の姿を眺めた時に、もっともこの気分に浸ることができるであろう。



写真1．隠岐の島遠望

がざりあればかやがのきばの月もみつ しらぬは人のゆくすえのそら

命には限りがあり、時にも限りがある。
粗末な萱の軒端の月を眺めて思うのは、
人の行く末は分からないということだ。

後鳥羽院を乗せた船は、島根半島の
美保関を出港し、夕刻、中ノ島の南側に
位置する崎の港に到着した。その夜は、
港の近くの三穂神社で過ごされたという。
戦に敗れ、脳裏に去来するのは世を統べる
ことのできなかつた無念と、人の運命
のはかなさであったのだろうか。



写真2．三穂神社

なみまゆくおきのみなとに行くふねの われぞこがるたえぬ思ひに

沖のみなと（水門）に向かって波間を
行く船には心焦がれる。都への絶えぬ思
いがあるが故に。

本土と島前間を往復する船は、中ノ島
と知夫里島との間の海峡を通る。木
路ヶ崎灯台はその航路を見下ろす突端に
あり、辺りには隠岐牛が放牧されている。
島の先端に立ち、行き交う船を眺めると
き、望郷の念は一層深まったに違いない。



写真3．木路ヶ崎灯台

とにかくにつらきはおきのしまつ鳥 うきをばおのが名にやこたえむ

とにかく辛いのは隠岐にいる身の上で
ある。島の荒波に暮らす鶉（う）のよう
なものだ。名を問われれば、憂（う）と
答えよう。

隠岐で暮さねばならない身の辛さが詠
まれている。この歌の寂寥感（せきりょう）は景勝地・
明屋海岸の、雲が垂れ、風が吹きすさぶ
冬の風景にふさわしい。

帝王にして当代随一の文化人にとって
みれば、都の文化から隔絶した離島での
生活は辛く、しかし同時に、置かれた境
遇を歌で究めるといふ趣きもあったので



写真4．明屋海岸

はなかろうか。

土木的意味合い

ここで土木との関連を考えてみよう。施設整備としては、観光スポットや観光ルートの整備がある。このケースでは、後鳥羽院を祭る隠岐神社周辺を徒歩で回るコースと、島の海岸べりに位置する崎や木路ヶ崎灯台を自動車で巡るコースが想起される。二重ループである。ループ(循環路)なので常に新しい風景を見ることができ、かつ、東日本大震災を顧みれば、災害時の代替ルートとなる。

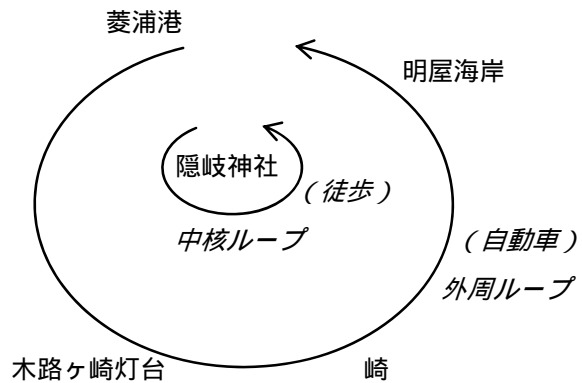


図2 . 観光ループ

次に、観光の土木事業における位置づけを整理する。

土木事業が実施される動機や理由は、生命安全、資産保全、生活利便などである。

このうち生命の安全は、何よりも優先されるべき課題であり、資産の保全がそれに次ぐ。これらに対しては、防災施設(河川堤防など)がその役割を担う。生活利便の向上は、新たな道路や上下水道の整備などにより実現される。

必ずしも必要といえない次のような項目は「意思実現」という語で括れると思う。

建築分野と区別しないが、国内外を問わず、昔つくられた城郭、天守閣、宮殿、社寺には実に豪壮なものがある。為政者の威光を誇示し、結果的に統治を促進したのであろうか。市井においても、商家や豪農などは格式や見栄により立派な邸宅や庭園をつくった。実用性のみを考えていては理解しがたい。ここには、必要なものではなく、つくりたいものをつくるという事業者の意思が働いていると判断する。

現代でいえば、住民意思に基づく美しいまちづくり、誇りのもてるまちづくりなどが該当する。他より抜きんでていなければ誇りももちにくい観光地ともならない。タワーの世界一争いなどはその典型である。最新機能、最新技術の追求も、その実用的な効能よりも意思の実現に意味があるように思う。

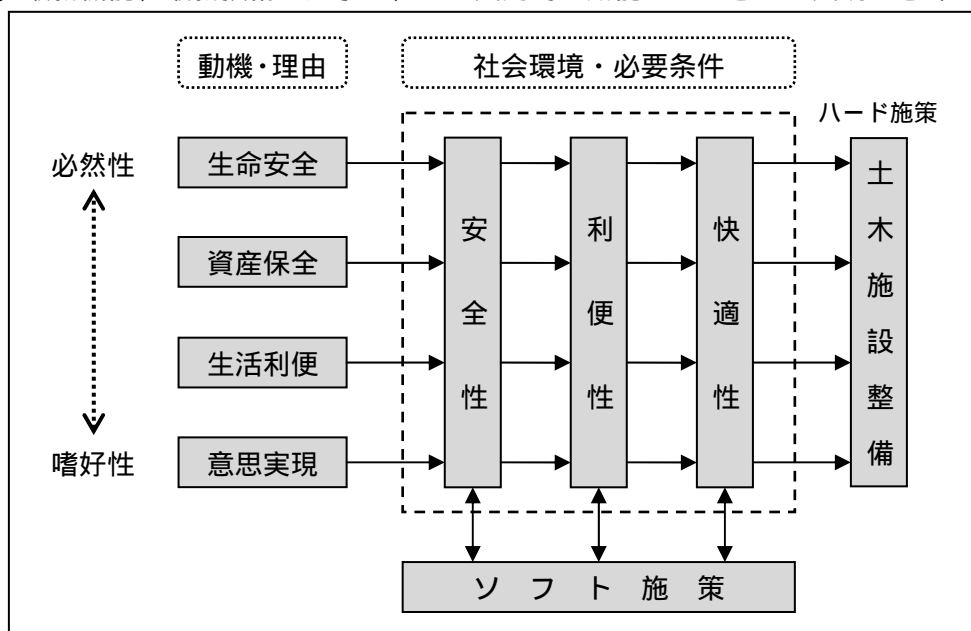


図3 . 土木事業の構成

行政判断に基づく自然保護や再生、歴史的文化的遺産の保護・保全も意思の実現といえよう。毎年国土交通白書等は「活力」を目標の一つとするが、これは発展的な社会でなければ国民大多数の意思実現は難しいことを説くものであろう。

このように土木事業の動機付けや実施理由として、「意思実現」は昔も今も確固たる地位を占めている。東日本の震災復興にあたっては、住みたいまちをつくるという視点を失ってはならないと思う。

土木事業の遂行には、その時代の社会水準に基づく必要がある。安全基準などがそれで、社会環境を反映した安全性、利便性及び快適性が求められる。この過程では、決してハード施設が優先されるのではなく、ソフト施策が全ての段階で考慮されなければならない。ソフトとハードとのキャッチボール（授受関係）が必要であり、安全性を例にとれば、ハードの防災（施設）と、ソフトの減災との適切な役割分担である。

観光のための諸施策は、土木事業における「意思実現」という動機・理由に区分されると思う。風景と歌の重ね合わせは、一見、土木と無関係なように見えるだろうが、読者諸氏において、土木的な試みであると理解していただければ幸いである。

建設環境（景観）

注

- (1) 土木フォーラム No.38 2008.12
- (2) 『後鳥羽院 隠岐の風景』吉田薫編集 SIR 刊
E-mail : fukei-ke@gold.megaegg.ne.jp

付録：後鳥羽院寸跡

水無瀬神宮（大阪府島本町）

かつて後鳥羽院の離宮のあった場所である。京・大阪の境で淀川右岸に位置する。後鳥羽院、土御門院、順徳院が祭られている。



高野山金剛峰寺境内 孔雀堂

後鳥羽法王の御願により正治2年（1200）に落慶し、仏師快慶作孔雀明王を安置した。堂は昭和に焼け昭和59年（1984）に再建された。孔雀明王は重要文化財として現存する。（説明板より）

隣接して後醍醐天皇建立の愛染院がある。



速玉大社境内の熊野御幸碑

西暦900年頃から400年間、皇室の熊野三山への参詣があり、これを熊野御幸という。京都からの往復は600数十キ口、約1カ月の長旅であった。

後鳥羽上皇29度（第2位）と書かれている。

